
探偵と天使

シェリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵と天使

【NZコード】

N1239E

【作者名】

シヨリー

【あらすじ】

一人の探偵がいた。彼の名前は谷村寛一・・・・・・・・ある日、天国から一人の天使がやってきた。その天使は一年前に死んだ寛一の恋人だった・・・・・彼女は未来で起きる殺人事件を解決するため現実世界に戻ってきたのだった。探偵と天使に次々起こる事件。果たして二人は無事に事件を解決する事が出来るのか？

(前書き)

初めて書いた小説です。

凄く読みづらいかと思いますがよろしくお願ひします。o(> - <)o

第一章「探偵の過去」

「もう、寛一早く、今度はあれ乗らうよ。」
一人の女性が言った。

長い髪ジーパンをはき服はTシャツ、その女性の名は浜谷桜。「分かつた、分かつたよ桜、そんなに急いで行く事ないだろう。」
そういうのは本を片手に持ち高い身長、髪は薄い茶髪の男、そう桜の恋人でもある谷村寛一だった。

「もう寛一ったら～とろいよ。」と桜。

「つむさいなあ、もう年寄りなの俺は分かる。」と寛一。

「そんなのどうでもいいの、ただ私は寛一と遊び・・・・・・」桜は最後まで言葉を続ける事が出来なかつた。

「何だよ。」と寛一は言つた。桜は、十秒位黙つたままだつたが急に笑顔になり寛一の背中を叩いた。

「つた～。いてえだらう。」と寛一。

「そんなのどうでもいいの。さあ早く行きましょ。」と桜は言つて寛一の手を持つた。

「えつ。」と寛一。

「良いでしょ。デート位、それに逆らうと約束破りになるよ。」と桜は言った。

「何が。」と寛一。

「言つたでしょ。私が剣道の試合で優勝したら、何でも言つ」とを聞いてやるつて。

恥ずかしそうに桜は言つた。

「そんな事言つたつけ。」と寛一。

「言つたよ。それより、昼食にしない。」と桜。

「さつきあれ乗らうつて言つたじゃない。」と寛一。

「良いの。寛一と話してたらお腹空っちゃった。それ行こうよ。」
桜はそう言つて寛一の手を引いた。

寛一は慌て後を追つた。

ただのカップルにしか見えないが、ある事件をきっかけに不思議なカップルになつてしまつ。そう探偵と天使のよつと・・・・・・・・・・

「お待ちどうさま。」

桜がそう言つて持つてきたのがフランクフルト一本に「一ラ。それにボテト一つだつた。

「お～皿わづ。さあ食つぞ。」と寛一は嬉しそうに言つた。
桜は笑つていた。

「もう、寛一つたら得意分野は食べる」とと事件だけね。」

「つるせえ、食わないと仕事出来ないんだよ。」

また桜は笑つた。

「何が可笑しいんだよ。」

寛一は恥ずかしそうに言つた。

「だつて、ほつぺたについてるもん。」

桜は笑つてそう言つた。

「何処?」

寛一は手で自分のほつぺたに手を当てた。

「私がとつたあげる。」

桜はそう言つてほつぺたを持つていたティッシュで拭いた。

「この後どうする?」

寛一は少し嬉しそうに言つた。

「この後はねえ、あのジェットコースターに並んでいる間に私がお土産を買つて、その後一緒にジェットコースター乗るの。で・・・・・その後、花火を見て電車で駅まで帰つて、そこから一人で歩いて帰るの。」と桜は笑つて言つた。

「結局、俺は順番待ちかよ。」寛一はため息をついた。

「約束破るの？」

桜に怖い顔で寛一を見る

「はい、並ひます。」 寛一はまだなかつた。

木に忙し彦から急に笑彦になつた。

仕方なしのまゝ

咲の言ひ通りの後

て帰りの電車の中、二人は仲良く電車の中で頭どうしをぶつけながら寝ていた。

黒馬は到着する直前は「人は起きて急いで電車を隠した」と笑った。

「帰ろつかあ」と桜は笑顔でいつた。

「いつまで続けるの？」

寛一は恥ずかしそうに言ひ。

良いの良いのそれよりまだ行こうね

寛一は照れていた。

家まで後2km位の所で事件は起きた。

細い道ではあるかい、一歩通して、いる道だ、た

桜はそつて、一息がんばり後ろを向いた。

すると、後ろから白い車が突っ込んできた。

「え！」と窓一。

一瞬の出来事だった。

寛一が気が付くと上には桜がいた。

寛一は桜が上に居てくれたおかげで助かつた。
しかし桜は違う。

白い車のナンバープレートが桜の頭に当たり一人とも病院に運ばれ
たが桜は頭部強打により死亡。

「寛一、大好きだよ。」これが寛一が聞いた最後の桜の言葉だった。

寛一は、病院のベッドで泣いていた。

第一章「探偵」

それから一年後、寛一は高校二年生になっていた。

「え、これで授業を終わります。」と体育教師の清原先生。生徒
からは（きよちやん先生）などと呼ばれている。

「さあ飯、飯。」

寛一が体育館から二階の教室に戻りうとした時だった。

「あの~。」

一人の女性が声をかけてきた。

「告白なら、断るよ。」

寛一は女性から声をかけられると必ずこうこう。

「嫌、違うんです。」

その女性は言った。

「じゃあ何？ 急いでるから早くして。」

寛一の頭の中は昼食の事でいっぱいだった。

「はい、実は今日朝来たらこんな手紙が入ってたんです。」
そう女性は言つと一枚の紙を寛一に渡した。

へ

君に話したいことがあるんだ。放課後、（てくあダあ）の下で待
つてる。

「何処だかさっぱり分からなくて。」

（確かによく分からない。この暗号を作った奴を紹介して欲しいくらいだ。）

寛一はそう思った。

「いつも帰り道に通る場所とか、ある？ 例えば公園とか？」

寛一は女性に聞いた。

「公園なら、昔よく仲の良かった男の子と遊んでました。時計台の針が5と0になつたら、帰つてきなさいってよく母に言わされました。」

女性はまるで昨日起きた出来事のように話した。

「時計台かあ~~~~~、あつ、分かつた。」

寛一は暗号を見ながら言つた。 「何が分かつたんですか？」

女性は言つ。

「今日の放課後、その公園に行ってみて下さい。もしかしたら、昔仲の良かった男の子に会えるかも知れませんよ。」

寛一は嬉しそうにそう言つ教室に入つてしまつた。

女性は寛一の言う通りに放課後時計台のある公園に行つたらしく。

女性の話によると、昔仲の良かった男の子が手紙の差出人で、告白されたそうだ。

彼は高校生探偵。

これまで数多くの難事件を解決に導いてくれた。

けど今は違う。

理由は分からないが、おそらく、一年前のあの事件がきっかけである。

そう大切な人を亡くしてしまつたから・・・・・・・・

昼食がすみ一人窓の方を見ているとこれまた一人の女性が話しかけてきた。

「おい、探偵マニア。一人で窓の外を見て青春かい？」

「つるせえなあ薰。大富豪の娘に俺の気持ちなんて分からねえよ。」

「ヤーヤしながら、話しかけてくる桜の友達、薰に寛一は言った。

「何言つてゐる。私は、桜のかわりにあんたをかまつてあげてんの。わかる。」

薰は言った。

「お前、今、何て言つた？」

寛一は怒つた顔で薰を睨んだ。「だから・・・・・・・・えつ・・・・

・・桜のかわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・

と薰は言つ。

薰は少しビビつっていた。

「いい加減にしろ、薰！もうあいつの事で悲しみたくないんだ。」

寛一は叫んだ。

周囲の人々が黙つて寛一と薰を見た。

「ごめん。」

薰は泣きそうになりながら言つた。

「もういい。あっち行つてろ。」

と寛一は言つた。

もう彼女の事は思い出したくない。絶対に嫌だ。でも、必ず俺の心の奥底には彼女が最後に言つた、（大好きだよ。）という言葉がある。

消したくても消せない、悲しくて切ない思い出だつた。

「よ～し、お前ら早く座れよ。」

教室に入つてきた担任の中山健司先生が言つた。

「よ～し、じゃあ始めるぞ。」

中山先生の号令。

どうやら（よ～し）は中山先生の口癖らしい。

「つしてこの日の最後の授業が始まつた。

寛一はボ�と授業を聞いていた。

周囲には寝ている人や携帯電話でメールしている人、漫画を読んでいる人などもいた。

寛一はやはりさつき怒ったしまった薫の事を心配していた。
「谷村この問題やつてみる。」中山先生は眠りそくなっている寛一に言った。

しかし寛一は半分気を失つてゐため聞こえていなかつた。

「谷村！」

中山先生は寛一に向かつて叫んだ。

「は・・・・はい！」

寛一は慌て答える。

寛一の驚きに周囲の生徒は笑顔を見せた。

寛一も少しだが照れていた。

”キーンコーン・カーンコーン”授業が終わるチャイムがなつた。
「ほら、見ろ。谷村が遅いからチャイムなつてもうたやろ。まあいいわ、次回最初谷村な。」先生はそう言つと教室から出でていつた。教室の笑いは授業が終わつても続いていた。

その後寛一は終令を終わらして家に帰つた。

そう、家で待ち続けている。（奇跡）という者も知らずに・・・・・

空の国では桜が老人と話をしていた。

「私はお前を地上に返す事が出来る。」

老人は桜に言った。

「本当ですか？」

桜は老人に驚きながら言った。

第三章「天国からの贈り物」

「但し条件がある。」

老人は桜にそう言った。

「何ですか？」

桜は少し不安になっていた。

「君には地上にいる、君の恋人と一緒に未来で起きる事件を解決してもらう。それが出来なければ・・・・・・・・・・・・」「出来なければ・・・・?」 桜は老人に続いて言った。

「君はこの世界にも、地上の世界にも居られなくなる。」

老人は桜に真剣に言った。

桜は悩んだ。

（解決出来たら、寛一とまた一緒に暮らせる。でももし失敗したら・・・・・・・・ああ～もうどうしよ。）

「どうする?」

老人は桜に言った。

「私やります。寛一ともう一度暮らせる可能性があるのなら、やります。私。」

桜は腹をぐぐつた。

「分かつた。じゃあ、目を瞑りなさい。」

老人は笑顔でそう言った。

桜は少し体全身の力を抜き、老人の言つ通りに目を閉じた。桜の目に映つたのは、過去の自分。

・・・・・まだ生きたい・・・・・・・・・

「もう目を開けていいぞ。」

桜の耳に老人の声が入ってきた。

桜は言うとおりに目を開けた。しかし、周囲は真っ暗である。「いいか、君は君の恋人にしか見えていない。君の姿をみてきっと驚くだろう。必ず会つたら事情を説明するんだ。いいな。」

老人の声がした。

「はい。でも、何処へ行けば・・・・・・・・」

桜は少し怖がつていた。

「まっすぐ、まっすぐ行きなさい。」

その後老人の声は消えた。

気が付くと桜は大きな扉の前で立っていた。

「どうすれば。」

しかし、もう老人の声はなかつた。

「仕方ない・・・・・・・・開けよう。」

桜は少しビビりながら扉を開けた。

桜の目に映つたのは見慣れた部屋だった・・・・・・・・・・・・

一方寛一は桜が老人と話をしているとき学校から帰つてくる途中だつた。

「はあー。」

寛一はため息を溢した。

（桜は今、どうしてるかなあ。薰、怒つてないだろうか。）

寛一はそんな事を考えていた。「ただいま。」

寛一はそう言うが家には誰もいない。

寛一が靴を脱いでリビングに向かつた時。

「ワン、ワン」

寛一が飼つている愛犬の武蔵がよつてきた。

「おー元氣があー武蔵。」

寛一は武蔵に餌をやつた後、自分の部屋に向かつた。
部屋に入ると、ベットに倒れ込んだ。

（一年前までは、賑やかだったのに。桜へ戻つて来てくれないかな
あ。）

寛一はそう思いながら目を閉じた。

「寛一、寛一。」

寛一の耳に聞き慣れた声が入つてきた。

「桜？」

寛一は寝ぼけながらそう言つた。

「そうだよ。起きて寛一。」

桜の声がまた寛一の耳に入つてきた。

「桜～」

寛一はフランフランしながら腰を上げた。

「おはよつ。寛一。」

寛一の畠には桜の姿が映っていた。

「お前。桜か？」

寛一は少し寝ぼけていた。

「そうだよ。」

畠の前にいる桜が寛一に言った。

「嘘だろ。」

やつと寛一は畠を覚ました。

「嘘じやないよ寛一。会いたかった。」

桜はそう言つと寛一を抱き締めた。

寛一にとつては奇跡としか思えなかつた。

「でも、何で・・・・・・・・一年前に死んだはずじゃ・・・・

・・・まさか夢か夢なのか？」

寛一はまだ畠にある現実を受け止めていない。

「落ち着いて寛一。生き返つた訳じやないの。」

桜は焦りながら言つた。

「どういう事だ。」

寛一は少し落ち着いて言つた。「えーとねえよく聞いて、寛一。」

桜はそういうと、全てを話始めた。天国の老人の事、どうして生き返つたかなど、寛一に全てを話した。

「じゃあ、未来で起きる事件を俺と桜で解決出来れば、また一緒に暮らせるってわけか？」

寛一は言つた。

「そうよ。やる？」

桜は素直に寛一に聞いた。

「当たり前だろ。また桜と一緒に学校行けるなら、死んでも解決してやるよ。それが俺の、嫌探偵の仕事だからな。」

寛一はそう言つた。

とても嬉しそうだった。

こうして一人は未来で起きる事件を解決する事となつた。

第四章 · 事件予告

桜はこの田舎の家で眠りについた。

お休み

寛一はそう言つたが櫻はもう寝ていた。

次の日

卷之三

「廣」一・・・・・・・・・?

桜はそう呟きながら、一階に降りた。玄関の前で武蔵が餌を食べて

卷之三

桜は笑顔で武蔵に言つたが、反応は無かつた。

（そうか、寛一以外の皆は私の事見えないんだ・・・・・）

木はノシ新しくなが

その後父は、リビングに入った。

「おせよ、桜。」

ギンザンでは、真一が朝食を作っていた。

寛一は料理をしながら桜に聞いた。

寛の西新が亡くなつて大分立のに一人しゃ寂しくなし

「大丈夫だよ。つるさー親が居なくなつて今は喜しハ立だか。そ

れに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

卷之三

桜は寛一に聞いた。

「今はお前がいる。さあ飯食お。」

寛一は桜に笑顔でそう答えると、朝食をテーブルに置いた。

うん、美味しいそう。

「………」
「……………」
「……………」

「まあ大丈夫でしょ。」

桜は寛一に言った

「 なら良いけど、俺、飯食つたら、武蔵の散歩行くから、インター
ホンなつても出るな。上でDVDでも見てる。」

わかつた

その後、寛一は武蔵の散歩に出かけた。

「今日も良い天気になりそうだ。」
そう思わないか武蔵。

真二の語弊に反応した武蔵に（「…………」）

(プルプル、 プルプル、 プルプル、 ・・・・・)

卷之三

彼は自分にそういは聞かせた。

それでもひいこぐも電話

「はいもしもし。」

實二春力

「ええ、違います。寬一、今

「用件があるなら伝えときますが？」

桜は久しぶりの電話のやり取りだったので少し緊張していた。「じゃあ良い。寛二君に覚悟をしておけと伝えてくれ。また電話する。」

低い声の男はそう言つと電話を切つた。

「は～、びっくりした。」

桜は少し落ち着きながら言つた。

「ただいま。」

家の扉が開いた。

寛一が帰つてきたのだった。

「何かあつたか桜。」

凄く機嫌が良い武藏を檻に入れながら寛一は言つた。

「あ・・・・・嫌・・・・・別に。」

桜は少し焦つていた。

「まさか、電話に出たとかないよな。」

さすが探偵、勘は鋭い。

「ごめんなさい。」

桜は正直に言つた。

「ハア～。で誰だつた。」

寛一は溜め息をつき、言つた。「知らない人だつた。でも寛一のことは知つてたみたいだよ。」桜は椅子に座りながら言つた。「どんなやつだつた？」

寛一は真剣な顔で言つた。

「低い声の男だつたの。（寛一はいるか？）つて聞いてきたからいませ～ん。つて言つたら、覚悟しておけつて言つて電話切られた。」

桜は小声で言つた。

「ふ～ん。覚悟しておけつてか。まあいいや。用があつたらまた連絡くるだろつし。それより電話鳴つても出るな。知りあいだつたらまずいから。」

「は～い。」

寛一の言葉に桜は元気に返事をした。

寛一は呆れていた。

その後、寛一は二階の自分の部屋でパソコンで小説を作つていた。

「寛一、暇だよ～」

一階から桜の声が聞こえて来た。

「 もう、いっかこなあ。」

まあそんなこんなやつでねむかに一戸が終わつた。

昨夜、寛一の母が前に使っていた部屋で寝ていた桜が起きてきた。

牛乳、コーヒー、ミルクティイそれともオレンジジュース?」

寛一は桜を完全におちよくなっていた。

スレーブのスレーブとしての歴史

「かしづけ」

「もう覗_いつたが。

寛一の接客に桜は笑つた。

卷之三十六

卷之三

突然電話が鳴った。

「誰だらうこんなに

寛一はそのままながら電話に出た。

「道二」

電話の主は作

「何の用だ。

寛一はその男に言った。

「私も探偵ですね。依頼を受けてるんだよ。電話の主は言つたよ。君協力して欲しけんだ。」

「内容しだいだ。」

寛一は少し怒りながら言った。「事件の依頼はこうだ。君の高校の生徒を誘拐したという依頼だ。」

男はそう言いながら笑っていた。

「意味が分からないな。」

寛一は冷静に言った。

「依頼者は君の高校の関係者を殺すと言っている。どうする？ 寛一君？」

男は続けて言った。

「分かった。引き受けよう。犯人の詳しい情報を教えて欲しい。」

寛一はそう言った。

凄く寛一は冷静だった。

「そんなの自分で調べる。」

男はそう言うと電話を切った。 「ふう。」

寛一は溜め息をついた。

「誰だつたの？」

心配そうに桜は近づいてきて言った。

「分からぬ。多分昨日、桜と話した奴だ。」

寛一は桜に言った。

「知り合いじやあなかつたの。」

桜は驚きながら言った。

「ああ、殺しの予告までしてきた。」

寛一は少し焦っていた。

「殺しつて・・・・・まさか・・・・・」

桜は何かを思い出したように言った。

「そうだ。桜が言ってた未来で起きる事件が起きようとしている。」

とにかく、クラスの連中が危ないかも知れない。中山先生に電話してクラスの連中を集めてもらつから。」

寛一はそう言うと電話をかけ始めた。

この時寛一は思っていた。

（望むところだ・・・・・）と。

第五章

「二人足りないクラス」

人は学校に向かつた。

「ハア～久しぶりの学校だよ。皆元気かなあ。」

桜はニコニコしながら言った。

「俺以外の人には桜の事見えない。残念だけど、会えることは出来るけど、会話とかは出来ないよ。」

「分かつてると。会えるだけで十分だよ。」 寛一の言葉に桜は優しく答えた。

寛一のクラスに入つてみると、もうそこには生徒が集まっていた。先生は生徒の人数を数えていた。

「来たか谷村、お前を入れて全員だ。」

中山先生が寛一に言った。

「すみません。ありがとうございます。」

寛一が中山先生にお礼を言つている後ろで桜が呟く。

「私・・・・忘れてるよ、先生。」

「でも、事件の話は本当なんだろうな？」

桜の言葉を一切気にせず、中山先生は言った。

「ハイ、間違いありません。」 寛一も桜の相手を一切しなかつた。

「分かつた。今から説明するから、席に座りなさい。」

中山先生の指示通り寛一は席に座つた。

桜は寛一の後ろでしょんぼり立つてゐる。

「今日、ここに全員集めたのには理由があります。」

先生が話始めると（何だよ、早く言え！）とか（そりだよ帰りたいんだから！）などと生徒が文句を言い始めた。

「静かに！良いか、今日の朝早くにこの地域で殺人事件が起きた。犯人は今も逃走している。危ないから、家で大人しくしてろ。」 先生が大声で喋つた。

「ハア～い。」

生徒は一瞬黙り込んだが、ある生徒の声で空気ががらりと変わった。

「よろしい。帰るときも、複数で帰ること、それでは解散。」 先生のこの一声で生徒は一斉に帰つた。

この時、寛一は思った。

（薰がいない……………）と。

「寛一君、これで良いんだなあ。」

中山先生が、椅子に座っている寛一に近づいてきて言った。

「嫌、千音時がいません。」

寛一は中山先生を睨めつけながら言った。

「千音時君か、彼女は君が来る前に連絡を入れておいた。風邪で寝込んでいるらしい。親がそう言ってた。」

中山先生がそう言つと寛一は「失礼します。」と言つてクラスを出た。

桜は寛一の後を追つた。

「ちょっと、何処行くの？ 寛一。」

門の前で寛一を捕まえた桜はハアハアと息をたてながら言った。

「薰の家だよ。」

寛一は焦りながら言つた。

「どうして、薰るは風邪で寝込んでいるって言つてたでしょ。先生が。」

少し落ち着いた桜は言った。

「先生はおそらく嘘をついている。」

寛一は言つた。

「どうして？」

桜は不思議そうに言つた。

「薰の家はあいつ一人だよ。両親は外国行つてな。」

寛一はそう言つた。

「そうか。でも何で？」

桜は小声で言つた。

「知らねえよ。とりあえず行くぞ。」

寛一はそう言つと桜の手を握つていった。

しかし、桜は動こうとしなかった。

「どうした、桜？」

少し焦りながら寛一は言った。「先生…………私の事忘れてた…………」

桜は泣きながら言つた。

「えつ。」

寛一は小声で言つた。

「私の事、死んでから話したことあるーー皆どうせ私なんか忘れてるのよ。」

桜は泣きながら言つた。

「それは違うよ。」

寛一は優しく言つた。

「どうしてそう言えるの？ 寛一？ 教えてよ。」

まだ桜は泣いていた。

「お前の事を忘れているやつなんかいないよ。皆の心の奥にお前との思い出を大切にしまつてる。」

寛一は優しい声で言つた。

「本当？」

桜は小さな声で言つた。

「たまには探偵マニヤを信じろよ。」

寛一は笑いながら言つた。

「うん。」

桜は寛一の言葉で笑顔を取り戻した。

「とりあえず、薫が心配だ。行こ！ 事件解決してまた一緒に学校行くんだろ。」

寛一はそのまま言いながら、桜の手を握つた。

「うん。」

桜はそのままと寛一の後を走つていった。

二人は薫の家前にいた。

桜はインター ホンに手を伸ばした。

「ちょっと待て。俺が押す。」 寛一は桜を止め、インター ホンを鳴らした。

「ハイ、どなたですか？」

家中の中から薰の母親が出てきて言った。

「薰さんと同じクラスの谷村 寛一です。薰さんいますか？」

寛一は笑顔で言った。

「今、あいにく家にいりません。何かあるなり云えときますが？」

薰の母親は心配そうに寛一に言った。

（やつぱり・・・・・）

寛一はこの時、こう思っていた。

「何処に行つたか分かりますか？」

寛一は薰の母親に睨めつけながら言った。

「何か薰について知つてゐるんですか？」

寛一が何か知つてゐる事を感じた母親は寛一に言った。

「詳しい話を教えてください。」 寛一がそう言つと薰の母親は「分かりました。どうぞ中に入つてください。」と言つて寛一を中に入れた。

桜も寛一の後に薰の家に入つた。

第六章

「千音時家」

「薰は一日前に友達の家に行つたきり帰つてこないんです。」 薫の母親は言った。

「やつぱり・・・・・・・・・・」

寛一は溜め息をついた。

「何か知つてゐるなら、教えてください。私、心配で心配で。」 薫の母親は小声で言った。

「ええわかりました。」

寛一は、そう言つた後薰の母親に全てを話した。

自分の家にクラスメイトを誘拐したと言つ電話があつたこと、電話の相手が殺害予告をしてきた事を。

「じゃあまさか、娘が……………」
薰の母親はますます心配そうな顔をした。

「可能性がないとは言えません。」

「ははつきりと言った。」

「イタズラの可能性は……………？」

「分かりません。ただ可能性として低いです。」

「は言つた。」

「どうしてですか？」

母親は言った。

「イタズラなら薰はもう連絡が取れてるか、見つかってるはずです。しかし、一日間も連絡が取れないとなると、イタズラの可能性は下がるだけです。」

「は説明した。」

「でも……………」母親黙り込んだ。

「それに、もう友達を無くしたくないんです。」

急に寛一が言つて、薰の母親も後ろにいた桜も驚いていた。

「友達……………寛一の耳に桜の声が入ってきた。」

「友達ですか？」

母親は小声で言った。

「もう、嫌なんです。目の前で友達が失われるのが、だから、薰は必ず見つけます。」

「は言つた。」

「分かりました。お願ひします。」

母親は一礼をして寛一に言った。

「何か手がかりになるようなものは、ありませんか？手紙とか。」

「は母親に聞いた。」

「そう言えば……………」薰母親はそう言つてコビングから出ていった。

「何、泣いてんだよ桜。」

隣で泣いていた桜に寛一は言った。

「だって、寛一が良い」と呟つかひ。

桜は寛一の服で涙をふいていた。

「やめろ。桜！」

寛一は凄く嫌そうに言った。

その後、薰の母が一枚の手紙を持って入ってきた。

それは

實一は不思議な云々

これが時田 無便愛には人でなくて、文章は薫の手のよが
ナジ、ココロ、の意をテガマハ、ニシテ、シテ、ソラニニシマ。

薰の母は頭を抱え込みながら言つた。

「えりですが、

• • • • • • • • •

寛一は悩んだ。

第7章 「薰の行方」

その頃、薰は倉庫のような場所で意識を取り戻した。

「つた～。たぐぢうして私がこんな目に合わなきや駄目なの。」

薰一人でブツブツと文句を言つていた。

彼女はロープのような物で手足を縛られていた。

立ち上がろうと、するがすぐに倒れてしまう。

「もうこのロープさえ切れれば、

薰はそう言いながら周囲を見渡す。

しかし、ロープを切れそうな物はみあたらなかつた。

その時だつた。

薰がいる部屋の扉が開いた。

中に入つて来たのは、仮面を被つた男だつた。

「あんた何者？」

薰はその男に向かつて言つた。「やあはじめまして。薰さん。私はkです。よろしく。」

仮面を被つた男は言つた。

「だから何者なのあんた！で！私をどうするつもりなの？答へなさい。」

「まあそう慌てるなあ。君と大切な一人のお友達は仲良く天国に行くんだから。」

仮面を被つた男は笑いながら言つた。

薰は自分の腰を見る。

そこには爆弾が仕掛けられていた。

「キヤー！」

薰は叫んだ。

「そうだよ。その苦しみ・・・・・・・・僕はそれが好きなんだ。」

仮面を被つた男は笑いながら言つ。

「つるさい。きつと寛二が今頃私を探してくれてる。」

薰は泣きそうになりながら言つた。

「来ないよ。寛二は。」

仮面を被つた男は笑いながらそう言つと外へ出ていった。

「も～どうして私がこんな目に合わなきや駄目なのよ～寛二～早く来てよ～。」

「もう少し恋愛しあけば良かった。」

叫んでいた薰は諦めて言つた。その頃仮面を被つた男は外で電話をしていた。

そう探偵と天使に・・・・・・・・

第八章「手紙の内容と犯人からの電話」

その頃、寛一は母親が持ってきた手紙を読んでいた。

母さんへ 父さんへ

NKYM4Aの家に行つてくる。心配しないで、大丈夫だから。
薰より。

「何か他にありませんでしたか。ほら何かいつもと違うなあ」とか。

「寛一は母親に笑顔を見せながら言つた。

「一つだけおかしい事があるんです。」母親は言つた。
「何がおかしいんですか?」

寛一は母親に聞いた。

後ろで桜も寛一と母親の話を聞いている。

「父親が薰、嫌いなんです。」

「父親が嫌い・・・・・」

寛一は母親の言葉を繰り返し言つた。

「ハイ。夫は単身赴任で3年に一度位しか帰つてこないんです。それ

れに・・・・・・・

薰の母親は黙り込んだ。

「それに何ですか?」

寛一は母親聞いた。

「ハイ。前に夫が帰つてきたときに空き巣に入られまして。」

「空き巣ですか?」

薰の母親は続けた。

「ハイ。その時、私は買い物に出かけていて、家には薰と夫だけでした。薰がまだ幼い頃だったので、凄く空き巣に怖がっちゃいました

て、夫に助けを求めるんですが、何しろ夫は気の弱い性格で、空き巣に殴られてそのまま気絶しちゃったみたいなんです。」

「じゃあ、それ以来薫は…………」

寛一は呟いた。

「ハイ夫を信じなくなつたみたいで。だから手紙に（父さんへ）見たいに書かないと思うんです。」

母親は言つた。

「なるほど…………」

寛一がそう呟いた時だつた。

“ プルプル プルプル ”

寛一の携帯電話がなつた。

「ちょっと失礼。」

寛一はそう言つと廊下に出ていった。もちろん桜も一緒にだ。

「はい。もしもし。」と寛一。

「高校生探偵の谷村寛一君元気か？kだ。」

電話の主は言つた。

おそらく、この間の奴だと寛一は感ずいた。

「この間の奴か？何の用だ。」寛一は怒鳴り散らして言つた。「そうだ。ところで依頼者はもう、一人君のクラスの生徒を誘拐したと言つている。さあどうする。探偵君？」

kと名乗る男は言つた。

「どうこうことだ。薫はお前が誘拐したのか？」

寛一は言つた。

「さあなあ。後、依頼者からの殺害予告がきた。また連絡する。」

kと名乗る男はそう言つて電話を切つた。

「くつそー。」

寛一は言った。

「誰からだつたの?」

桜は心配そうに寛一に言った。「大丈夫ですか?」

桜の言葉と同時にリビングから薰の母親が出てきて言った。

「犯人からの電話です。薰さんは誘拐されました。」

寛一は薰の母親にそうはつきり言った。

「嘘でしょ。薰が・・・薰が・・・・」

薰の母親は氣絶しそうになりながら、言った。

「大丈夫です。必ず薰はつれて帰ります。心配しないで下さい。」

寛一は、薰の母親を支えながら言った。

「お願いします。薰を・・・助けて下さい。」

薰の母親は寛一に抱きつきながら言った。

「分かつてます。」

寛一はそう言つと、桜をつれて薰の家から出た。

第九章

「NKYM4A」

「くつそー（NKYM4A）の意味が全くわかんねえ。」

家に帰つてからも寛一は（NKYM4A）の解読に頭を悩ませていた。

その頃桜は台所で夕食を作つていた。

「NKYM4Aって「コードネームかなあ?」

桜はあくびをしながら言った。

「わからない。NKYM4Aに秘密は必ず、この事件の犯人いや、俺に電話してきたKと名乗つた探偵の正体だとは分かつてゐるんだ。」

寛一は桜の方を見ながら言った。

「えつーちょっと待って寛ーー！それは違うと想つよ。NKYM4Aはkつて探偵に依頼してきた依頼人なんじょ。kはまた別人だと思つけど。」

桜は驚きながら言った。

「それは違う。依頼人は俺のクラスメイトを一人誘拐して殺人予告をした。と俺達に思わせたかったんだ。実際は依頼人なんて居なかつたんだ。kがクラスメイトの薫を誘拐し、殺人予告をしてるんだ。」

「寛一は桜に言った。

「じゃあ何で！kはそんな」とする必要があるの？」
桜は寛一に近づいて言った。

「分からぬ。でも、その可能性の方が高いだらつ。捜査を搅乱させるためか、他の犯人の目的なのか……」
寛一はさらに頭を悩ませてしまった。

「今日はもう辞めようよ。」

一旦沈黙が続いた部屋に桜の声が響いた。

「どうしたんだよ。急に…………」

桜の言葉に驚きながら寛一は言った。

「寛一の悪い癖だよ。考えすぎな所。一旦今日は落ち着いてまた明日から考えよ。」

桜は寛一に笑みを浮かばせながら言った。

「…………そうだな。よし飯食つぞ。」

少し黙り込んでいた寛一は開き直ったかのように言った。

「うん。」

桜は笑顔で言った。

その後一人は夕食始めた。

「ねえ寛一。」

夕食中一人はこんな事を話していた。

「うん？」と寛一。

「生き返つたら知り合いのいない遠くの地域でまた音楽を始めたいの。」と桜は言った。

「どうして？」と寛一。

「この地域に暮らしてたら薰とかビックリしてまた氣絶するよ。だから…………」

と桜。

「確かにそうだな…………」

寛一は中2の時の事を思い出した。

「でしょ。そんなん迷惑かけたくないし。」

桜は少し考えながら言った。

「沖縄なんてどうだ。」

寛一は元気付けるように桜に言った。

「あ～良いね。」

桜はまた笑顔を取り戻した。

「今、どんな唄作ってるんだ？」

寛一は桜に言った。

「【君がくれた思い出】って曲。」

桜は答えた。

「もう出来るのか？」

寛一は言った。

「うーん。歌詞は出来るんだけど、まだ歌えない。」

桜は答えた。

「じゃあ事件を解決して、生き返ってから聞いてやるよ。」

寛一がそう答えると・・・

「本当に！？本当に聞いてくれる！？」

桜のテンションが急に上がった。

「ああ約束する。」

寛一はテンションの上がる桜に笑顔で言った。

「よし。頑張って完成させよー！」

桜に気合いがはいった。

「その勢いよい。N K Y M 4 A の解読の方にもまわしてくれたらなあ。」

寛一は嫌みつたらしく言った。

「ハア～イ。」

桜は笑みを浮かせながら言った。

桜にとつてとても大切な約束になつた。

その後一人はN K Y M 4 A の解読に頭を悩ませていたが解読に近づけることさえ出来なかつた。

「もう遅いし今日は寝よ。」

寛一は桜に言った。

「そうだね。明日も学校だし、ハア～眠たい。」

桜のあくびする姿に少し笑了た。

「お休み～」

桜はそう言いながら部屋に入つていった。

「お休み～。」

寛一はそう言つたもののその後一・三時間N K Y M 4 Aについて考えた。

明日、起きる事件の事も知らずに・・・・

第十章

「事件」

次の日も学校で二人は、（N K Y M 4 A）について頭を悩ませていた。

「おい！！！お前大丈夫か！？独り言なんて・・・・」
そう他の生徒から言われてもしかたない。

寛一は桜と話してるつもりだが、ほかの生徒には桜が見えないので寛一が一人で話してるようにはかから見られるのだ。

「ああ・・・大丈夫だ・・・心配すんな・・・」

寛一に話しかけてくる生徒一人一人に答える姿を見て桜は大笑いしていった。

こんな感じで二人は昼休みを向かえた。

「しゃ～飯や～。」

二人は屋上で昼飯を食べようとしていた。
ここは、桜と寛一の二人だけしかいない。
二人が見つけた秘密の場所なのだ。

「うん。食べよ。」

桜は、笑いながら言つた。「なんで、笑うんだよ。」

寛一が恥ずかしながら言つた。

「だって、面白いんだも～ん。」

また、桜は笑いながら言つた。

昼食も終わり、教室に戻ろうとした時だつた。

「生徒は、全員校庭に出なさい。緊急事態です。これは避難訓練ではありません。すみやかに校庭に出なさい。」防犯サイレンとともに

に放送が流れた。

防犯サイレンが流れる廊下を生徒が小走りで走っていた。その一方寛一と桜は先生たちの向かう方向に進んでいた。

「あっ！…中山先生！…！」

桜の指差した方向を見ると中山先生を初め色々な先生方が集まっていた。

寛一と桜は先生方が集まる部屋の扉の前に座り込んで黙つて話を聞いていた。

「殺されたのは、一体・・・・・？」

中山先生がそう聞いた後、ほかの先生がこう答えた。

「体育教師の、清原先生です・・・・・」桜は、怖くなつて少し怯えてしまった。

その時に偶然扉に手を当ててしまい音が鳴った。

「誰だ！…！」

それに気がついた中山先生が叫んだ。

（バ）カ・・・・・

寛一はそう思いながらため息をついた後

立ち上がりて姿を見せた。「谷村君どうして・・・・・

寛一の姿を見た中山先生が驚きながら言った。

「それより、清原先生は死んだんですか？」と寛一は言った。桜は足を震わせながら、寛一の後ろに立っていた。

「何を言つてゐのかねえ？早く外に出なさい。」

教頭先生は言った。

「分かりました・・・・・

寛一のいさぎよさに桜は驚きを隠せなかつた。

だがその時・・・・・

「ちよつと待ちなさい。寛一君・・・・

寛一を止めたのは、校長先生だった。

「どういふことですか？先生・・・・・・・？」

教頭先生は、慌てて言った。「まあこれを見てからにしなさい。」

校長先生はそういうながら、清原先生の携帯電話取つて寛一に見せた。

携帯電話にはこうかかれていた。

寛一君、これじゃあ全然面白くなこよ。もつと本氣出すつよ。面白いものをやうう警察をね。

くよつ

「この寛一君って言つてるのは君のことじやないのかねえ。」

校長が言つた。

「そ・・・・それは・・・・」

寛一は言葉をなくした。

「まあ今、我々があへだこうだ言つても仕方ありませんよ。警察を

呼びましょつ。」

その後寛一は、中山先生に連れて行かれて校庭に出た。桜も一緒に言つた。第十一章「桜からの願い」

「ねえ寛一・・・・・・・・・・」桜は頭を抱え込みながらボーッとしている寛一に言つた。

あの後、学校では全校緊急集会が行われ全校生徒全員下校になつた。

しかし寛一は、携帯電話に残っていたメッセージから寛一は事件に何らかの形で残っているのでは無いかと疑われ会議室で警察の調べが終わるまで待たされていた。

「何……？」

寛一はボーッとしながら答えた。

「やつぱりあの……あの事……薫の事を警察に言つた方が良一どうがはー。

桜は思いきつて言つた。

何て

寛一にはまたホーリーとしてしれ

「確かに寛一の気持ち分かるよ。でもあの携帯電話の画面に出てた
でしょ。あの文章が本当なら絶対もう一人、もう一人死ぬかも知れ
ないんだよ。寛一はもう死ぬのは見たくないんでしょ。誰も死なせ
たくないんでしょ。」

桜は泣きそうになりながら言った。

いい加減にしてよ！ 寛一！」 桜はそう言いながら 寛一を右手で殴つた。

「どうして殴るんだよ。桜！？」
寛一は少し驚きながら言った。

抱え込んで一人で悩むの？あなたは一人じゃないでしょ。一人ぼっち何かじゃないよ寛一！私だつている。警察だつて確かに寛一にとつては頼りないかも知れないけどいよいよはましじゃない。どうして人を信じるつて事をしないの？ねえ寛一！」

久しぶりに桜はめちゃくちゃ怒った。

「ごめん…………桜…………」

寛一は泣きそうになりながら言つた。

初めてだつた。

寛一の泣き顔を見るのが…………桜にとつて初めてだつた。

「信じてよ…………寛一…………少しばしは私達を…………」

・
・
・

桜も泣きそうだつた。

「そうだな。ずっと一人で悩んでた。たまには人を信じるつてのも悪くないかあ。」

寛一は先ほどとは大きく違ひ笑顔でいつた。

「ありがとう。寛一…………」

桜も少し笑顔になれた。

「一つ約束はする。」

寛一は言つた。

「えつ、何？」

桜は涙を拭きながら言つた。

「俺がお前を生き返らせる。」寛一は堂々と言つた。

「楽しみにしてる。」

桜は笑顔でいつた。

寛一の言葉がいつまでも桜の心に響いていた。

会議室の扉が開いた。

「寛一君、警察が来てる。早く君も来て話をするんだ。」

中山先生が会議室の入り口からそういふと寛一は桜と一緒に事件現

場に向かつた。

そこにはもうすでに何人か人だかりができていた。

警察官がとにかくたくさんいた。

桜は寛二の手をしつかり握っていたが寛二が手を揺らすと、何かに気付いたように廊下に出ていった。

「え、と君が高校生探偵の谷村寛二君だね。早速だけど詳しく聞かしてくれないか、何があつたかを……」

凄く年老いたベテラン刑事が言った。

「分かりました。」

寛二はそう答え、今まで起きた事を全て話した。
Kと名乗る、人物からの誘拐、殺人予告。千音時薰がKに誘拐されたこと。全てを話した。

「じゃあ、誘拐されたは、今何処にいるかも不明なのか?」

中山先生が言った。

「ハイ、薰の母親に会って話をしききました。その時電話がなったんです。Kからでした。彼は（N K Y M 4 A）という、暗号を出してきました。更に僕の学校の関係者を一人殺すとも言つてました。実際に殺人予告通りに事件が起きてしまった訳です。画面の内容が真実なら犯人はもう一人殺します。」

寛二はおそるおそる言った。

「という事は犯人は一人つて事かあ……………」
よし！皆さん、ご協力ありがとうございました。後は警察官の仕事です。皆さんをお帰り下さい。後、寛一君は犯人から連絡がありしだい警察に報告するように。いいね。」

さつきのベテラン刑事が言った。

「分かりました。」

寛一はそういうとすんなり教室を出て桜と一緒に学校を後にした。

第十一章「一回目の犯行」

寛一が時計を見るともう夜の9時になっていた。

「ちゃんと言えた寛一？」

桜は寛一に言った。

「ちゃんと言えたさ。大丈夫。」

寛一が笑顔で桜に答えたので桜は凄く嬉しくなれた。

「良かった。いつもの寛一に戻つて。」

桜は笑顔で寛一に言った。

「早く帰ろ。明日も学校だから。」

二人はその後、急ぎ足で帰つた。

「お休み寛一。」

桜はそういうと部屋に入つて行つた。

「ああお休み。」

その日も寛一は「ZKYM4A」について考えていた。

そんなときだつた。

「 プルプル、 プルプル、

寛一のいる部屋に電話の音が鳴り響いた。

「 ハイ、 もしもし。 」

寛一がそう答えると同時に桜が部屋から出でてきた。

「 Kだ。 」

Kと名乗る男からだつた。

「 何の用だ。 」

寛一が怒りながら言った。

その様子を桜が心配そうに見ていた。

「 依頼者からの殺人予告が来たので報告しておく。 」

Kは言った。

「 お前が学校の先生を殺したのか？ 」

寛一は言った。

「 探偵君、 どうしたんだ。 殺人を止める事が出来なかつたじゃないか？ 」

Kは急にわけの分からぬことを言い出した。

「 お前が殺したのかつて聞いてるんだよ！ 」

「 寛一落ち着いて。 」

寛一が余りにも大きな声を出したのでビックリした桜は言った。

「寛一はまだ若い。まだお子ちゃまだ。そんなんじゃ私には勝てない。」

Kは笑いながら言った。

「どういう事だ。」

寛一は冷静になりながら言った。

「まだ分からぬのか。これは君と私の運命をかけた戦いなんだよ。」

「

Kは笑いながら言った。

「意味が分からぬな。」

寛一は言った。

「明日の午後一時の人をもう一人殺す。一秒の狂いもなく。君は殺害現場を探してくれ。そこに僕もいるだろ。タイムリミットは放課後。君がもしその場所を見つけることができなかつたら。学校を爆発させる。次々と爆発する学校の中で生徒達は混乱し逃げ場を失う。どうだい想像するだけでも、興奮するだろ。」

そして電話は切れた。

「薰もいた。」

寛一の耳に薰の声が聞こえていた。

「嘘でしょ。薰は？ 薰は大丈夫なの寛一？」

桜は心配そうにいった。

「分からぬ。心配すんな。必ず薰は助けるから。殺人もさせねえ。それに・・・・・・・・・・・・・・」

寛一は言った。

「それに・・・・・・・・・・・・・・？」

桜は小声で言つた。

「生き返つてまた一緒に暮らすんだろ。」

寛一は言った。

「分かった。信じるよ、寛一を。」

桜はそう言つと部屋に戻つて行つた。

（爆発は少しヤバイな。）

寛一は、この時、いつも思っていた。

次の日

「今日は集会だから昼休みには校庭にすぐに集まれよ。」

中山先生だ。

「ねえ寛一午後一時に殺人が怒るつて本当なの?」

桜は寛二に言つた。

卷之二

「……は少し焦つていた。

۱۰۹

人予告何か起こすんだろうって……………」

寛一はやうに頭を悩ませた。

結局、集会の時間を向かえてしまった。

集会ではまず生徒会の話、部活の表彰式等が行われていた。

午後12時55分。

「えへ。凄く悲しい話なので静かに聞くよつて……………」

校長先生の話だ。

（どうしたく仕掛けて来いよ。）

寛一はこの時こう思っていた。

「今回、非常に残念な事に我が校で清原先生が何者かによつて殺害されました。」

誰も知らなかつた情報だったので、辺りは騒がしくなつていた。

午後12時59分。

（残り一分・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

寛一は心中でカウントしていた。

「清原先生は監さんも知つての通り、凄く優しい先生でした・・・・・・」

校長先生の話は続く。

その後、生徒、教職員による黙祷が行われていた。

（どうしたく・・・・・仕掛けて来いよ。）

午後一時になつた。

しかし何も起きない。

「何も起きないよ寛一。どうこう事？」

桜はそう言った。

その後、何も起ることなく、無事に集会は終わった。

第十八章

「NKYM4A解読」

その後、二人は殺人が起こっていないか学校中を探した。

「薰大丈夫かなあ・・・」

桜は心配そうに言った。

「なあ、桜。」

寛一が急に呟いたので桜は少し驚きながら答えた。

「なに?」

「分かった。NKYM4Aの意味が・・・・・・・・・・・・

・誰が犯人かも、全て謎が解けた。」寛一は笑いながら言った。

「嘘でしょ。寛一。誰なの犯人は。」

桜は驚きながら言った。

その時だった。

「ドーン」

第十九章

「爆発」

爆発と共に学校中が揺れていた。

そして、警報ベルが再び鳴り響いていた。

「来たか。」

寛一はそう呟きながら窓の方を見た。

「寛一やばくない。これって……………」
桜は泣きそうになりながら言つ。

「ああ、Kが仕掛けて来やがつた。」

二人が見ていたのは、火の海となつた、一階だつた。

「どうしよ……………」

桜は言う。

「薰と犯人を探しに行こう。」

その時だつた。

「プルプル、

寛一の電話が鳴つた。

「もしもし。」

寛一は電話に出た。

「Kだ。三階の視聴覚教室で待つて。」

電話はKからだつた。

電話はすぐに切れた。

「行こう、薰が待つてる。」

寛一の言葉に桜は頷いた。

「うん。」

二人は三階に向かった。

薰と犯人が待つてゐる三階に・・・・・・・・・・・・・・・・

十章

「犯人」

「ついたぞ。」

二人は三階にいた。

「中に入るの。」

辺りは先ほど違い、生徒は皆避難していたのでとてめ静かだつた。

「中で薰が待つてゐるから。助けに行かないと。」

寛一はそう言つと視聴覚教室の扉を開けた。

「・・・・・暗いねえ。」

中は凄く真つ暗だつた。

「し、静かに。誰かいる。」

寛一は凄く焦つていた。

「よく来たね寛一君。」

部屋中に響く男の声と共に明かりがついた。

「やつぱりあなたでしたか。先生……………」

「嘘でしょ。」

桜は呟いた。

「やつだよ。僕だよ。」

一人の田の前にいたのは、倒れている薰と中山先生だつた。

「N K Y M 4 A がどうして私だと分かつた。」

中山先生が言った。

「簡単な事でした。あなたの名前は中山。全てア段のひらがなでできている。4 A つていうのはア段を意味してるんだ。N K Y M の N はナ・ニ・ヌ・ネ・ノだからア段はナ。他の K、Y、M も同じようになると K はカ、Y はヤ、そして M はマを表す。だからあなたになるとんだ。」

「お見事だ。寛一君。やつぱり君は凄い。」

寛一の推理を聞いていた、中山先生が笑いながら言った。

「でも、どうしてこんな事を……………」

寛一が一番気になつてゐた事だつた。

「君には生きて欲しくなかつた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

」

中山先生は話始めた。

第二十一章「理由」

「桜君の事は君がよく知つてゐるだろ。」

中山先生は言つた。

「交通事故の事か?」

寛一も桜も驚いていた。

「あの事故の車に乗つていたのは僕なんだよ。」

中山先生は笑いながら言つた。

「どういつ事だ。」

「あのとき僕は学校帰りだつた。君達を見たとき、確かに氣おつけようと思つた。少し広い場所に出たら声をかけようと思つた。だが、あの時車のアクセルが効かなくなつて・・・・氣が付いたら君達二人がたおれていたのが目に入つてきたのだよ。」

「嘘だろ。」

中山先生の言葉に驚きを隠せなかつた寛一は呟いた。

笑いながら中山先生は言った。

「たったそんな事で色々な人に迷惑かけたって言うのか、無実の清原先生、爆発で逃げまとう生徒達、それがお前の計画なのか！」

寛一は怒っていた。

「そうだよ。桜君が死んでからこっち全く良いことなんてない。ひき逃げの取り調べから逃げ、学校でも散々苦労してやつと計画が実行出来たんだ。そして、この計画はもうすぐ終わりに向かえる。見ろ！」

薰が中山先生の隣で気絶していた。

薰の腰には爆弾が巻かれていた。

二人は少し焦っていた。

「関係ないだだつて、ふざんけるなよ、寛一君。君を苦しめたいんだよ。君の知り合いを全て無くし君が苦労しみ泣き叫ぶ所を見たいんだよ。君の両親が死んだ時みたいにね。」

我慢が出来なくなつた寛一は中山先生に襲いかかろうとした。

「おつと。動くなよ。」

中山先生はそう言つと、薫の頭に銃口を向けた。

「辞めろ。」

寛一は叫んだ。

「ハアハアハアハアハアハア！ そうだ、そうだ、そうだよ寛一君。君の苦労しみなんて楽しいんだ。この爆弾はね寛一君、彼女の心臓停止と共に爆発する仕組みになつてるんだ。彼女が死ねば皆死ぬ、さあどうする？ 寛一君。」

中山先生はそう言つと寛一に銃口を向けた。

「寛一・・・・・・・・・・じうするの、寛一・・・・・・・・・・」

桜は泣きそうになりながら言つた。

第二十一章「天使、復活と死」

「寛一君、君も死になよ。」

中山先生は笑いながら言つた。彼はもつ意識はほぼ無こと言つてもおかしくなかつた。

「先生、もう辞めましょひよ。こんなことしても無駄なだけです。」

「つるさい！ じうせ、皆死ぬんだ。君から死ね！ 死んでか桜とまた一緒に暮らしていけば良いんだ！ 寛一君。」

寛一の言葉をよそに笑いながら言つた中山先生は寛一に向けていた

銃の引き金を引いた。

「わよひなひ・・・・・・・・

その時だった。

信じられないが、目の前に桜の姿があった。

「どうして・・・・・桜君が・・・・・・・・

桜が急に現れたので驚いた中山先生は腰を抜かしてしまった。

「あ・・・・・桜？」

寛一はおおむおおむ倒れている桜に近づいて行つた。

「「めん。 寛一。 また死んじやつた。」

小声で笑いながら桜は言った。

「嘘だろ、嫌だよ、桜！ また生き返つて歌聞かしてくれるんだろ桜
！」

寛一は桜を見ながら泣き叫んだ。

「「めん。 寛一。 本當にげめん。 寛一。 約束守れなかつた・・・・・

桜はそう言葉を残すと息を引き取つた。

「桜～！」

寛一は泣き叫んだ。

桜は寛一の田の前で光輝き、空へと消えていった。

残つたのは三人の生存者と火の海だった。

「薰……」

寛一は泣きながら薰の方を見てみると薰は田を覚ましていた。

「寛一、大丈夫？」

薰は小声で言つた。

「大丈夫だ、桜が助けてくれた。今、助けてやるからな。心配すんな。」

寛一はそう言うと薰の腰に巻かれている爆弾を見ていた。

「一分切つてる……」

寛一は爆弾のタイマーが一分を切つてる事に気が付いた。

「どうするの寛一……私、まだ死にたくないよ……

薰は泣きながら寛一に抱きついた。

「うるさい……じつとしてる。今、外してやるから。」

寛一はさつと爆弾を解体し始めた。

第一十二章「天使の魔法」

「くそ！爆弾が止まらない。」

寛一は凄く焦っていた。

「じつするの寛一……後、四十秒しかな……寛一……寛一……」

薰は泣きながら言った。

「くそ！桜に約束したのにくそー！」

寛一は小声で言った。

「後、二十秒……寛一……！」

薰は泣きながら寛一に抱きついた。

「！」……薰……もつ無理

だよ。」

そう言つた時だった。

・・・・・・・・・・・・無理じやあないよ・・・・・・・・・・・・

寛一の耳に桜の声が響いた。

後、十秒を切っていた。

「寛一…………爆弾取れたよ…………逃げよう…」
爆弾が取れた事に気づいた薫が寛一に言つが寛一はぼくとしていた。

「寛一…………？」

いつのまにか爆弾のタイマーが動かなくなつていた。

「じつとしてる、薫。」

寛一は小声で言つた。

周りは火の海、もうびびり出すことも出来なくなつていた。
…………びびりするんだ……桜…………

寛一はそつと思つた。

…………田を瞑つて信じるんだ。必ず助かるつて…………

「寛一…………」
薫は小声で寛一に言つた。

「田を瞑つて信じるんだ。必ず助かるつて…………」

寛一は薫にそつ言つた。

「分かつた。私、寛一信じるね。」

薰はそうこうと田を瞑つた。

・・・・・ ありがとう・・・・・ 今まで・・・・・・・・・・・

寛一の耳に桜の声が響いた後、一人は気を失つた。

第一十四章

「解決」

その後寛一は病院のベッドで田を覚ました。

「桜のお母さん・・・・・・・・」
「・・・」
「・・・」

寛一はベッドから起き上がりながら言った。

「ここは、病院よ。大丈夫。」

桜の母親が笑顔でいった。

「薰は・・・・・」

一番気になつていたことだつた。

「大丈夫。君と薰ちゃんはあのとき、学校の裏にある公園で倒れていたつていつて知り合いが言つてたわ。その知り合いが車でここまで連れてきてくれたつて。薰ちゃんは、腕と足に少し火傷をおつた

だけで他は大丈夫だつたみたいよ。奇跡だつて言つてたわ。」

その後も桜の母親が気絶していたとき何があつたか全て教えてくれた。

（確かにあの時中山先生は一人より少し離れていた場所にいた。）
寛一はそう思つて聞いた。

桜の母親が小声で言つた。

「 そ う で す か 」

少し沈黙が続いたが寛一があることを言い出した。

夢の中で桜が語りました・・・・・

え？ 。。。

「お母さん伝えてくれつて。長い間あつがといがれました。これからも元氣でいてねつて。」

寛一の言葉に桜の母親が少し笑つた。

寛一も同じだつた。

そして、寛一はいつ思った。

ありがとう
元気でな
つて

エピローグ「探偵と天使」

あれから一年。

寛一は大学生になり、毎日充実した生活を送っていた。

「次は 駅！次は 駅！」

寛一は駅から出て広場を歩いていた。

う 寒み

彼は寒がりだ。

その時たった

1

目の前に寛一位の女性がいた。

「…」めんなさい。前見てなくて。」

彼女は桜にそつくりだつた・・・・・・・・・・・・・・・・・・

0
8 /
4 /
2
0

完

(後書き)

いかがでしたでしょうか、自分で書いてはまだまだと思います。

また何か面白い小説が出来たら投稿するのでその時はよろしくお願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1239e/>

探偵と天使

2010年10月17日03時08分発行